

櫻田家の長男はウルトラマン

アルティメットルパン三世

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある宇宙人の野望を阻止すべく時空を超え別の宇宙にやって来た若きウルトラマン『ウルトラマンゼロ』。

その宇宙にある地球は彼が見てきた地球とは違ったのは王国があると言うこと。

そしてゼロはある青年の命を助けるため彼と一心同体となったのだ。

だがゼロは彼のとんでもない事を知る。それは…王族『櫻田家』の長男だった!?

コレはウルトラマンゼロと一心同体になった青年『櫻田 籃』とその家族の物語…

『「俺達のビックバンは止まらないぜえ!!」』

注意！

ウルトラマンゼロと城下町のダンデライオンのクロスオーバー作品になっております。

ゼロの時系列は『劇場版ウルトラマンジード』終了後となっておりませんがウルティメイトブレスレットは壊れませんのでストロングコロナ、ルナミラクル等も登場させます。

アニメと原作をごちゃ混ぜになっているかもしれませんが宜しくお願いします。

(ここ重要)ウルトラマンメビウスに登場したクソ野郎『蛭川光彦』が出ます。他にもウルトラマンシリーズに出てきた悪人も出そうかと…(80に出てきたサタン党等)

上記の通りについて苦手な方はブラウザバックを、大丈夫な方はお進み下さい。

次回更新日：10月25日(予定)

目次

プロローグ 日常と異変 | 1

第1章 会遇

第1話 運命の出逢い (Aパート) | 10

第1話 運命の出逢い (Bパート) | 24

プロローグ 日常と異変

朝日が差し込む午前6時：日差しの眩しさに目を覚ましたこの俺『櫻田 籃』は上体を起こし両腕を伸ばしながら欠伸をする。

「…起きるか。」

そう言いベッドから離れてパジャマから学生服に着替え1階に降りた後、歯を磨いて顔を洗いリビングに行く。

「おはよう母さん。」

「おはよう籃、何時も早いわねー。」

「まあ早く起きとかないと後から大変だから…ふああ…眠い。」

リビングには俺の母さん『櫻田五月』が朝ご飯の支度をしていた。籃は挨拶をし五月が挨拶を返す。それから籃は朝ご飯の準備の手伝いをする。

それから数分後、誰かがリビングに来た。

「おはようお母さん、籃兄い。」

「おはよう葵。」

「おはよう葵…っつか頭を撫でるなっつば…」

「まあまあいいじゃない、兄妹なんだから。」

挨拶をしたのは俺の双子の妹で長女である『櫻田葵』。

家族の中でも一番優しく学校でもかなりの人気を誇っている

が俺にはかなり甘く何時も俺の頭を撫でてくる。

まあ、正直に言うとは嬉しいけど…

その後3人で朝ご飯の準備をし、出来上がる7時頃…洗面所が騒がしくなり始めた。

「じゃあそろそろ茜と光起こしてくるから。」

「うん、コッチはやっておくから起こしてきて。」

この時間になると俺は起きるのが遅い妹2人を起こしに行く。リビングから出て2

階に行く途中、洗面所は戦場と化している。

「おい遙早くしろ！輝の我慢が限界だ！」

そう言いながらトイレのドアをノックしているのは次男の『修』。

「待つて修兄、もう少しだから。」

トイレの中から言い返したのは三男の『遙』。

「あ、兄上…僕は大丈夫です…！」

そう言うも足が震えて小便を我慢しているのは四男の『輝』。

「もー！父さん長すぎだつてば！」

一家の大黒柱である父『総一郎』に怒ってどいてもらおうとしている四女の『岬』。

「葉、しっかり歯を磨きなさい。」

「はい、奏姉様。」

現在、歯を磨いているのは六女の『葉』。

そして隣にいるのが次女の『奏』である。

「やれやれ…騒がしいもんだな。」

その光景を見ながら俺は2階へ行きまだ寝ている2人の妹三女の『茜』と五女の『光』の部屋に入るとスマホを弄りイヤホンを繋げて茜の右耳と光の左耳に挿すと音量を4分の1にし再生させる。

《フ〇エノ〇ワミ!!アアアアアアアアア!!》

「ほわあっ?!」

突然のK〇Mボイスに2人はピツタリ起き上がった。

「おはよう二人共、7時だからさっさと降りてこいよ?」

「あー!?またやられたー!」

「いい加減止めてよ basket兄!心臓に悪いって何時もいつてるでしょ!」

「何時までも寝ている2人が悪い、可愛い妹2人の為にコレでも音量は4分の1だしさ

れたくなければ早く起きるんだな？」

「ぐぬぬぬう……！」

ゲス顔をしながら俺は悔しがつてる2人を後にしリビングに戻った。

そう、俺の家族は四男六女の十人兄弟に父母の計12人の大家族なのである。

リビングに戻るともう既に俺と茜と光以外の皆が席に座っており俺は葵の隣に座る。その後学生服に着替えた茜と光がリビングに来て自分達の席に座り全員が揃った所で朝ご飯を食べる。

『いただきます！』

「今日はママ特製野菜オムレツです。皆残さず食べるのよ。」

「うげ、グリーンピース入ってる……」

「光、好き嫌いしていると身長伸びないわよ？」

「母上、僕は好き嫌いでないので大きくなれますよね？」

「ええそうね。菜、よく噛んで食べてね？」

「はいお母様。」

「そーいやトイレットペーパーのストック切れてたけど今週の買い物当番誰だった？」
「修ちゃんでしょ？」

「あ、俺か。じゃあ今日の帰りに買ってくる。」

「頼んだぞ修。」

「親孝行な子達で助かるわ。」

「いえいえ。」

今日も変わらず会話の絶えない食事風景。ここら辺までは普通の大家族の日常なのだが…我が家には一つだけ違う所がある。

「もうあなたたつてば！食事中ですから新聞を見るのはやめてください！」

そう言つて母さんは父さんが見ていた新聞を取り上げる。

すると何故か頭に王冠を被っていた。

「親父い…何で王冠被つてんの？」

「いやあく城に置いてくるの忘れててな、せっかくだから…」

「今頃城にいる皆さんが捜してると思うから後で謝っておきなよ？」

「うっ?!?わかった…」

「パパ本物の王様みたい！」

「いや光、一応本物の王様だからな？」

そう、我が家は王族なのだ。

そしてこの日、俺は巨人と出会い。国と家族を守る為に怪獣や侵略者達と戦う事になるとは思いもつかなかった：

一方、籃がいる宇宙とは違う宇宙『アナザースペース』では：

「シエアアア!!」

巨人：M78星雲光の国出身、ウルトラセブンの息子である若きウルトラ戦士『ウルトラマンゼロ』が銀色に輝く空飛ぶ怪獣『宇宙ギャオス』の大群と対峙していた。

『ギャオオオッ!!』

宇宙ギャオスは口から黄色の光線『超音波メス』を放つがゼロは頭部に装着した二つの宇宙ブーメラン『ゼロスラッガー』を手にしゼロスラッガーを盾にして超音波メスを跳ね返す。

跳ね返された超音波メスは他の宇宙ギャオスの身体を真つ二つにし爆散した。

「まだまだ行くぜ！シエア！」

『ギャオオオツ!!?』

そのまま勢いをつけて次々と宇宙ギャオスを切り裂いて倒していく。

「オラア!!」

ゼロスラッガーを投げつけた後頭部のビームランプから放たれるビーム『エメリウムスラツシユ』を放ち宇宙ギャオスを倒し更に投げたゼロスラッガーがエメリウムスラツシユに当たると軌道を変えその方向にいた宇宙ギャオスを倒し更にもう一つのゼロスラッガーにも当たりまた軌道を変えて別の宇宙ギャオスを撃破する。

「つたく、キリがねえな…だったら！」

そしてゼロはゼロスラッガーをカラータイマーの両サイドに装着しエネルギーを貯めカラータイマーから放たれる光線『ゼロツインシユート』が宇宙ギャオスの大群を一網打尽にする。

「コレで終わりだああああ!!!」

『『『ギャオオオオオツ!!?』』』 ドガン!!

大爆発を起こし煙が晴れると数100体はいた宇宙ギャオスの大群は肉片一つも残

さずずに消え去っていた。

「よし！任務完了！さっさと帰るとする。「先ほどの戦い…お見事でしたよ？ウルトラマンゼロ。」ッ！」

任務を果たし帰還しようとしたゼロだったが何者かの言葉により後ろを振り向く。そこにいたのは蟬のような顔に両腕がハサミになっている宇宙人が「フオフオフオフオ」と声を出していた。

「お前は…バルタン星人シーカー！」

「どうでした？私かが創り上げた怪獣は…まああの宇宙ギャオスは私の作品の中でも一番雑魚ですが…」

「そんな事はどうだっていい！最近行方を晦ましていたが何か企んでいるつもりか！」

「まあそれについては嘘ではありませんね…貴方達ウルトラマンには20億近くの同胞を殺され地球を狙うも次々と邪魔され我々バルタンは地球侵略を断念した…だが私はお前達ウルトラマンが居ない宇宙に辿り着いた！」

「ウルトラマンの居ない地球…まさか貴様！」

「そうだ！その地球を支配し我々バルタンの住みやすい星にしてやるのだ!!!」

「そんな事させるかあ!!」

ゼロはシーカーに殴りかかるがすり抜けた。

「ククク…残念ながら私はそこにはいませんよ？まあ私を探そうとしたって宇宙は広い…せいぜい風潰しする事ですね。」

シーカーはフオフオフオフオフ!!!と笑いながら消え去った。

「くそっ…こうしちゃあいられねえ!」

ゼロは左腕に付けている腕輪『ウルティメイトブレスレット』を突き出すとブレスレットが輝きゼロの体に伝説の巨人『ウルトラマンノア』から託された白銀の鎧『ウルティメイトイージス』が装着された姿『ウルティメイトゼロ』

へと変わる。

「待っているシーカー!その野望…俺がぶっ潰す!」

そう言いゼロはウルティメイトイージスの力で時空を超えるのだった。

果たしてこの先、ゼロを待ち受ける運命とは!?

…:To be continued

第1章 会遇

第1話 運命の出逢い (Aパート)

ウルトラマンゼロSide

突如現れたバルタン星人シーカーの野望を阻止すべく俺は奴の気を辿って奴がいる宇宙に着いた。

「風潰しとか言っていたが：俺を甘く見ていたなシーカー。つとこうしてる場合じゃねえな、さっさと地球に向かうとしますか。シエアツ！」

早速俺は奴が狙う地球へと向かった。

籃Side

「しっかし茜の人見知りはどうにかなんないのかね？」

「もう…籃兄いも奏と同じような事言ってる。」

「仕方ないだろ？元々あの監視カメラは俺達を守ってくれてるし、何より次期国王を決める為なんだからよー？」

「まあそれもあるけど……」

俺の妹の茜は極度の人見知りである。他人ならまだしも監視カメラにさえビビってしまう。

今日の朝は葵と奏、修に茜の5人で登校してたが俺の背中に隠れてたし監視カメラに見られた時なんかしつかりしがみついていたし：俺と修が慣れろって言ったが

「でも2000台って多くない!?てか週末にカメラの位置が変わってたからせつかく位置覚えたのにい……」

位置覚えたってすげえなオイ。

この町には監視カメラが至る所に設置されている。王族も普通の生活をさせたいという父さんの方針なのだ：それでは安全の確保が難しくなる。

そのためこのように監視カメラが設置され24時間監視体制という形になる。まあ安全なのだが：監視されっぱなしはあまりよくないと思う。まあ茜の言う通りカメラの台数が多いという文句は同意する。

まあその後奏が生徒会がある為離脱し修も離脱。俺も先生への提出物がある為離脱した。

学校に到着しすぐ様職員室に行き先生に提出物を出した後そのまま教室へ向かう。

その時に葵と茜が屋上の階段から降りてきて合流した。

茜が自分の能力を使って空から来たんだろう。

まあそういう訳で茜と別れた後俺達は教室に入り無事遅刻はしなかった。

それから放課後…俺と葵は茜を迎えに行つてるところだ。

つと、そう話してる内に茜がいるクラスに着いた。

「茜ー迎えに来たぞー（よお）」

「「「キヤーーーーー!!葵様よおーーーー!!」」」

「「「籃様もいるわーーーー!!」」」

俺達が教室に顔を出すとそのクラスの女生徒達が一斉にやつて来て色々言われる。

つておい茜、何その自分の人気がないって顔。やめろよ、そんな目で俺を見るな!?

「お姉ちゃん達は大変だね、どこでもチャホヤされちゃって。」

「言つておくがチャホヤされるのも大変だぞ?歓声が殺到するし…」

「私はそうかなー?でも部活の勧誘とかは多いかもね。」

通学路で俺達が話していると…茜が誰にぶつかつた。

「(ぎ)っ(ぎ)っ(ぎ)っ(ぎ)っめんなさい!!後ろに目が付いてなくて…!」

「後ろに目が付いてるとか怖いだろうそれ」

茜がぶつかつた相手に謝るが、ぶつかつた相手は怒りもせず何かに追われているかのようには走っていった。

と、おもいきや

「きゃあ!?ひっ…ひったくりよおー!!」

男は目の前にいた女性のバッグを奪い取りそのまま逃げ出した。

「アイツ引つたくり犯だったか!?!」

「おねーちゃんこれお願い!」

茜は自分のカバンを葵に渡す。引つたくり犯を捕まえるつもりだろう。

「茜、気を付けてね?」

「大丈夫、エレガントに行くよ!」

葵にそう言うのと茜は走る姿勢に入る。

「正義は…」

勝あ—————つ!!!
「!!!」

茜は猛スピードで引ったくり犯を追いかけて行った。

それを見ていた葵と籃はこう思った。

(エレガント…)

さすが双子、思った事は一緒である。

その頃、ビルの屋上にシルクハットを被った紳士風の男がその光景を見ていた。

「それでは、ゲームの時間です。」

紳士風の男は怪獣の絵が描かれたカードと見たことの無いタブレットらしき機械を手にしていた。

『ネロンガ!!』

男はタブレットにカードをかざすと怪獣の名が呼び出されたと思えばカードはタブレットに吸い込まれその瞬間、球体となって町のだ真ん中にへと落ちた。

「まずは小手調べです。せいぜい逃げなさい人間共よ…ダアアダアア…」

そう言い男は姿を消したのだった。

一方その頃、

「み、見ないでえ〜!!!」

茜の人見知りが発動されていた。

それもその筈、茜が人質を取っていたひったくりを殴り倒した。が、それを見ていた人達が茜の周りに集まり歓声を挙げていた。その瞬間：

ゴゴゴゴゴゴ………!!

「な、何だ一体!？」

「お、おい!アレはなんだ!？」

男性が指さした方向を見ると巨大な怪獣『ネロンガ』が姿を現した!

ー ゴオアアアアアン!!

バリバリバリイ!!!

ネロンガは頭部の角と2本の触覚らしき物から電撃を放ちビルを破壊する。

「か、怪獣!？」

「何やってんだ茜!さっさと逃げるぞ!」

茜が怪獣を見ていると追いかけてきた籃と葵に手を引っ張られ逃げる。

「籃兄…一体何が起きてるの?」

「解らねえ…けど今は物凄くヤバいって事は解る。とにかく今は逃げるしかできねえ

!」

「待つて籃兄い!彼処に子供がいる!」

籃がそう言いながら走っていると葵が指を指したマンションに兄妹であろう逃げ遅れた2人の子供が2階と1階を繋ぐ階段にいた。

「なんてこった……！葵、茜を頼む！」

「籃兄い！どうするつもり？」

「助けるに決まってるんだろ！」

そう言い籃は子供がいる場所にへと走り出した。

子供がいる階段の真下に着いた籃は泣いている少年に話しかけた。

「おい！誰かいるか——！」

「ここだよ——！いもうとがおきないんだ！」

「何だ?!? 良いか！妹を抱いてそこから飛び降りろ！俺が受け止める！」

「むりだよお！できっこない！」

「無理じゃない！良いか！お前男の子だろ?!? 男にはやらなきや行けない時がある！勇気を出して飛び降りるんだ！大丈夫だ！俺が絶対に受け止める………！」

諦めるなあああああああ!!！」

籃の叫びに少年は妹を抱き締めながら一緒に飛び降りた！

そして籃の身体に藍色のオーラが纏われる。

すると煙が出てきて、籃の姿が大きなクッションに変わり、兄妹はクッションによって衝撃を受け止められた。

兄妹がクッションから退いた後、クッションは籃の姿に戻った。

「言っただろ？俺が受け止めるって。それにしてもお前中々勇氣あるじゃねえか！」

「えへへ…」

勇氣を出した少年に、籃は少年の頭を撫でる。

撫でられた少年も照れて顔を赤くした。

「つと、そうしてる場合じゃないな。早く妹を病院連れてかないと…」

「籃兄(い)ー!!」

籃が行こうと思った時、葵と茜が籃の元に走ってきた。

籃も2人と合流しようとした瞬間…!!

ーゴオアアアアアン!!!

ネロンガがマンションを破壊した!このままでは籃と兄妹の瓦礫の下敷きにされてしまう!

「(このままだどこの子達も…仕方ねえ…)クソつたれええええ!!」

「籃は妹をおんぶしている少年を抱っこすると走ってきた茜に向かって投げた！」

「茜え！お前の能力でこの子達を！」

「えっ!?うわあ!!」

急に頼まれた茜は焦ったが能力を使って猛スピードで走り兄妹を受け止めた。

「ふう…コッチは大丈夫だよ basket 兄

ガッシャアアアアアアアン!!!

………あ、ああ…いやああああああ!!!」

「お兄ちゃあああああん!!」

目の前で兄が瓦礫の下敷きにされた光景に茜と少年は絶叫する。その後走ってきた葵もこの光景を目にしショックを受け膝をつけてしまう。

「そんな… basket 兄いが…」

「ひっく…(グス)… basket 兄待つてて!今助けるから!」

泣きながらも茜が少年を置いた後、能力を使って重たい瓦礫を軽々と退けていく。退け続けているとやつと basket の手が見えた。

「 basket 兄(い)!!」

2人は急いで瓦礫を退けて basket を引つ張り出した。

だが、 basket の胸に大きな瓦礫が刺さってそこから血がドクドクと出続けていた。

「う……うう……」

「籃兄(い)!!」

「お兄ちゃん!」

「み……皆、無事か……?」

「無事じゃないのは籃兄だよ! 早く病院に行かないと!」

「無理だ……こんなに血が出てんだ……病院に着いた時にhゴフツ!!」

「籃兄い! 喋ったらダメ!」

籃が血を吐き出し葵が泣きながら止めようとする。

葵の泣き顔を見て籃は苦しむも誤魔化すように笑い顔を作ると

「……なんて顔してんだ葵……せつかくの美人さんが台無しだぞ……」

「(グスツ)……こんな時にふざけないでお……」

「……お前も無事だったか……すまなかったな……急に投げ出してよ……」

「いいよ……ヒック……おこつてないから……」

鼻水たらしながら泣いている少年を見て籃はそのまま作り笑いを歪ませなかった。

「ゴオアアアアアアン!!!」

マンションを破壊し他の場所で暴れていたネロンガがコチラに気づきその巨体でコチラへと向かってきた。

「皆…俺からの最後の頼みだ…俺を置いて逃げる…」

「嫌だ！ 籃兄を置いて逃げないよお！」

「絶対に助けるからそんな事言わないでよ！ 籃兄い！」

「いいから聞け!!」

「ッ!? (ビクッ!)」

「茜…最後に父さんや母さん…奏達にバカな兄貴でゴメンなって言つといてくれ…少年…最後に君の名を聞かせてはくれないか…?」

「グスッ…坂田…二郎…それがボクの名前だよ…」

「二郎か…いい名だよ…それと葵?…」

「……………何? 籃兄い…?」

「俺が居なくても心配させんなよ?…お前って俺が居ないと色々面倒だしな…?」
「…何で今そんな事言うのよお…ぐすつ…」

籃の言葉に葵は泣き出しかける。

ーゴオアアアアアン!!!

ネロンガの角が光だした。また電撃を放とうとしているのだろう。

「俺の事はいい……！逃げろ……！」

「やだよお！籃兄い！」

「籃兄！死なないで！」

「お兄ちゃん！」

そしてネロンガは電撃を放とうとしたその時……！

「ウルトラゼロキイイイック!!!」

バキイツ!!

ーゴオアアアアアン!!?

突如現れた巨人が炎を纏ったキックをネロンガの頭部にくらわした。その衝撃でネロンガの角は折れた。

「ワイドゼロショット!!」

ーゴオアアアアオオン…!?

更に巨人は腕をL字に組むと腕から光線が発射されネロンガに当たる。光線をくらったネロンガは倒れて大爆発を起こし倒された。その光景を見ていた茜達は…

「凄い…怪物をあつという間に…」

「倒した…!?!」

「すつげえええ!」

茜と葵が驚愕しており二郎は凄いと目を輝かせていた。

そして、瀕死の状態である籃は…

「ありがとう…ウルトラマン…」

と言い目を閉じた。

「っ! 籃兄!? 籃兄! 目を開けてよお!」

「籃兄い! お願いだから! 死なないで! 籃兄い!」

「お兄ちゃん! しつかりしてよ! お兄ちゃん!」

茜達は籃に声を掛けるも目を覚まさなかった。

この日、櫻田 籃は…

「やだ…やだよお…」

自らの命を捧げ2人の子供を助け…

「籃兄い……お願い……」

2人の妹と少年の前で息を引き取り……

亡くなった……

「いやあああああああああああ!!!」

怪獣が暴れた町で茜と葵の泣き叫ぶ声が響いた。

後半へと続く。

第1話 運命の出逢い (Bパート)

ゼロSide

ネロンガを倒し今現在、俺の目の前で小さな生命が消えかかろうとしている。このまま見過ごす訳にはいかねえな…

「シエアー！」

俺は一度空を飛び嘗てウルトラマンが赤い球体を作ったのを思い出し俺も赤い球体を作った。そして青年の上に止まって光を放ちながら青年をコチラへと引き寄せた。

さーてココからが本番だ！

茜Side

私達が籃兄の死に悲しんでいた時、先程怪獣を倒した巨人さんが赤い球体になるのを見た。

赤い球体はコチラへとやって来たと思ったら眩しい光を放った。

「きゃああ!」

「眩しい?」

光が収まり目を開けると赤い球体は消えていた。

私には何が起こったのかさっぱり解らずお姉ちゃんも私と同じ様子だった。

「おーい！ 茜ー！ 葵ー！ 無事かー!？」

後ろを振り向くとお父さんがコチラへと走ってきた。

「2人とも無事の様だな、それにしても籃は何処…ッ！ら、籃？ どうしたんだ籃!?! しっかりしろ!」

籃兄の事を思い出してしまい私はまた泣きそうになる。

お姉ちゃんも私と一緒に泣きかけている。

「籃兄は……この子達を助けて瓦礫の下敷きに…」

「そうか………」

お父さんはそれ以上何も言わなかった。これ以上聞いたらまた私達が悲しむと解っていたのだろう。

その後、籃兄は病院に運ばれ霊安室へと連れていかれた。

籃 S i d e

（おい……おいつ！起きろ！）

「はっ?!あれ?俺は確か死んだはずじゃあ……え?俺の胸って瓦礫が刺さってたんじゃあ……」

服を捲ると胸の真ん中に刺さっていた筈の傷が無かった。

一体、何が起きているのか全く理解出来てない状況だった。

（やっと思きたか、中々目を覚まさないから駄目だったと思つたぜ。）

突如謎の声が聞こえた。俺は声の主を探そうと周りを見ると後ろに見覚えのある巨人が立っていた。

「あ、貴方は怪獣を倒した巨人……」

（俺はゼロ、ウルトラマンゼロだ。）

そう言うと巨人……ウルトラマンゼロは自分の名を言った。

ゼロが俺に名を乗ったで俺も名乗る事にした。

「俺は籃、櫻田籃だ。」

（おう、ならお前の事はランって呼ばせてもらうぜ。早速だがまずはお前に謝らないといけねえ……悪かった。俺が早く駆けつけていればお前は死ななかつただろう……）

「否、ゼロは怪獣を倒して俺の妹2人と2人の子供を助けてくれたんだ。気にしないでくれ。」

(そうか…それなんだが一つだけお前が助かる方法がある。俺達ウルトラマンは地球上では長く居られない。俺がお前と一体化する事で俺は戦わない時でも地球上でも居られるしお前の傷も治る…まあ簡単に言うとな『win-win』の関係だな?)

「成程な…いいいぜ、俺もまだ死ぬ訳にはいかないし家族が心配するしな。」
(解った、これから俺達は一心同体だ!)

ゼロはそう言うのと小さな光となつて俺の中に入っていった。それから俺の意識は暗闇の中へと吸い込まれた。

「はっ! 此処は病院? って此処霊安室じゃん!」

俺が目を覚ますと病院の霊安室で寝ていた。つまり俺は死亡扱いと言うことになる。驚いていると左腕に見たことの無い腕輪が付けられていた。

(その様子だと無事成功した感じだな?)

「えっ? どつかからゼロの声がするぞ?」

(そりゃあ俺がテレパシーでお前に話し掛けているからな。)

「耳塞いでも聞こえるう!」

(そうだよお?)

俺とゼロが下らない茶番をしているとドアが開いた。

俺がドアの方に首を傾けると看護婦さんが綺麗な花が入っている花瓶を持っていたが俺を見ると落としてしまい花瓶は見事に割れてしまう。

「せ、せせせせ…せんせええええええい!!!?」

「(うわあっ!?)」

看護婦の叫びに俺とゼロは少しビビってしまった。

そして叫びながら看護婦さんは出て行ってしまった。

「よし、さっさとトンズラしますか。」

(いいのか? 勝手に逃げ出しても。後で騒ぎが大きくなる可能性が高いぞ。)

「良いんだよ別に、それじゃあ行くぞ。」

俺は能力を使い液化化してドアの隙間から窓の外へ移動し人気の無い茂みに隠れると能力を解除して元の姿に戻る。

「よし、脱出成功。」

その後俺は落ちていた帽子の汚れを払って被る。顔を隠して町中を歩いていたら時にゼロが問いかけてきた。

(お、おいラン…今やったのは何なんだ?)

「すごいや話してなかったな。実は俺、王様の息子なんだ。」

(成程な…ハアツ!?お前が王様の息子お!?)

「ああ、俺の家族は王様である父さんに王女の母さん、それに3人の弟と6人の妹が居る大家族だ。皆も俺と同じような能力を持っているんだ。」

(うそーん…)

「次はこつちが質問するけどゼロはどうしてこの星に?」

(…………俺はある宇宙人の野望を阻止する為に別の宇宙からやって来たんだ。そいつは俺達ウルトラマンがいない宇宙を侵略しようとしている、さっきの怪獣ネロンガも奴が召喚したのかもしれない。)

「そうか…ん?」

俺達が話している時…

(ツ…右に避けるラン!)

ビーーーーッ!!!

「うわっ!」

ゼロが言った通り右に避ける。謎の光線が俺の隣を通り野良犬に当たると野良犬は小さくなった。

「チツ…避けられましたか。」

前を向くと目の前にシルクハットを被った紳士風の男が両手持ちの光線銃を持つていた舌打ちをした。

(気をつけろラン…コイツは宇宙人だ！)

「ええ?!いきなりゼロが言っていた奴が目の前に?!」

「はあ…貴方は何か勘違いをしています。私の名はダダ、正式名は『ダダ168号』と申します。以後お見知りおきを。」

そう言い紳士風の男は宇宙人の姿に戻った。

(このままじゃあ不味い…ラン!ちよつと体借りるぞ!)

「解った。(ギユイン!) ……言え、お前の目的は何だ?」

「ふつ、私の目的はウルトラマンゼロ…貴方をシーカーに献上して我が星を繁栄させる為、生け捕りさせて戴きます。」

『そうか…やれるもんならやってみな!』

そう言い藍の体を借りているゼロはダダと戦闘を開始する。ダダはミクロ化器銃からビームを撃つが避けられその隙にゼロはミクロ化器銃を奪おうとする。

「コラー!離しなさい!」

『ほらよっ!』

「うおっ!？」

ダダが奪われまいとマイクロ化器銃を離そうとしなかったがゼロが急に離したので反動で倒れマイクロ化器銃を離してしまう。

「返してやるぜ! オラア!」

マイクロ化機を蹴りあげそのままダダにシュートした。

「グフオア!？」

マイクロ化器銃にぶつかったダダは勢いよく吹っ飛ばされる。

そしてゼロはマイクロ化器銃を持つと叩き壊した。

『これで俺を生け捕りにする事は出来なくなつたな?』

「おのれえ……こうなればあなたの首をシーカーに捧げてやる!」

マイクロ化器銃を破壊されたダダはどこからか出した人形と赤が主で剣先が白の短剣のような物を出した。

(何んだアレ? 人形?)

『何! スパークドールズだ?!』

籃はなぜ人形を出したのか解らなかったが人形の事を知っているゼロはスパークドールズである事に気づいた。

《モンスライブ!!アーストロン!!》

ダダはスパークドールズをの左足を剣先に当てると短剣から音声が出てきてダダの姿が凶暴怪獣『アーストロン』となった！

ー ギャオオオオン!!

『さあ来なさいウルトラマンゼロ！来なければこの町を破壊してやる！』

「うわあああ!!」

「助けてくれえー!!?」

アーストロンになったダダがそう言うのと町を破壊し始める。町の人達は走ってアーストロンから逃げ始める。

「このままじゃあ町が!」

(ラン！お前の左腕を前に出せ！)

「左腕を?こうか:~?」

籃が左腕を前に出すと腕に着けているブレスレットからメガネのような物が現れた。

(それはウルトラゼロアイ！それを目に装着して右側にあるスイッチを押せ！そうすれば俺になってアイツと戦える！)

「解った！力を貸してくれゼロ！」

(ああ！いくぜラン！)

「(ジュワ!!)」

籃はウルトラゼロアイを手にし目に装着、二人の掛け声でスイッチを押す。すると籃がウルトラマンゼロに変わっていき変身が終わると巨大化した！

「シエアアアッ！」

推薦BGM：ウルトラマンゼロのテーマ

巨大化したゼロは着地しアーストロンに向かって決めポーズをする。

「俺はゼロ…ウルトラマンゼロだ!!」

先に攻撃をしたのはアーストロンだった。

アーストロンは口から『マグマ光線』をゼロに向かって放つがゼロは真正面からマグマ光線をくらった。

『バカめ！避けもせずにくらうとは！』

ダダは光線をくらったゼロを馬鹿にしていると…

「ハアアアアッ！」

『何い！グホオ!?!』

ゼロが炎の中から飛び出しそのままアーストロンの顔面に拳の一撃を与える！殴られたアーストロンは後ろに数歩下がった。

「まだまだいくぜ！オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ！オラア！」

ー ギャオオオン!!?

ゼロはアーストロンの怒涛のラツシユを叩き込む。

頑丈な皮膚を持つアーストロンでもゼロのラツシユに耐えきれず更にはアツパーをくらい後ろに倒れ込む。

『おのれ！コレならばどうだ!』

アーストロンは頭部の角『スラツシユホーン』を振ってゼロを切り裂こうとするも軽々と避けられる。

「ハッ！ゼエアアア!!」

ゼロはアーストロンの頭を抑えて炎を纏った右手のチョップ『ビッグバンゼロ』でスラツシユホーンを破壊した。

『ギャアアアアアッ!!?頭がああああああ!』

アーストロンの弱点である角を折られたダダは激痛に苦しむ。

「コレでトドメだ！ハアツ！」

ゼロはゼロスラツガーを手にしカラータイマーの両サイドに装着しエネルギーを貯めて『ゼロツインシュート』をアーストロンにくらわせた！

「うおおおおお!!!」

『お、おのれウルトラマンゼロオ！私を倒した所で我々の計画は止まらない！ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!?』

ー ギャオオオオン……

ドカアアアアアアン!!!

ダダの断末魔と共にアーストロンは倒れて爆発した。

「シエアツ！」

倒した事を確認したゼロはそのまま何処かへ飛び去ったのだった。

籃Side

宇宙人と怪獣を倒してそれからの事だった。

俺はゼロに頼まれてさっきの怪獣…アーストロンのスパークドールズ(?)を見つけましたが手にした瞬間黒い煙をあげて消えた。更にあの宇宙人が持っていた短剣もぶっ壊

れていた。

そして現在、俺は実家の前に立っていた。

(どうしたんだよ、自分の家なんだから早く入ったらどうだ?)

「馬鹿言うな。さつきも言ったけど俺は家族から死亡扱いされてんだぞ? そんな事があつたのに堂々と帰ってきてみる: 余計パニックが起きるに決まってるだろ!」

俺とゼロがそうこう言い争っている:

ドサツ!

「ん?... ツー!」

後ろで何かを落とした音がしたので振り返ると其処には母さん、葵、奏、修、茜、岬、遥、光、輝、栞が俺を見て驚いていた。

「ら、籃?」

「本当にお兄様なの?」

「よ、よお...」

俺はどうすればいいか解らず苦笑いしながら手を振った。

そしたら妹達の目から涙が溢れ出すと葵、奏、茜、岬、光、栞が俺に向かって抱きついてきた。

『籃兄いいいいいいい！(お兄様あああああ) (籃兄いいいいいい) (兄さあああああん)
(籃ちやああああん) (お兄様ああああ!!)』
「ちよつ！うわあああッ!？」

いきなり姉妹全員に抱きつかれた俺は受け止めきれず倒れ込む。そして皆から色々言われた。

「今までどこにいたの籃兄い！さつき病院から電話が来て『籃様が生き返った』って聞いて急いで行ったのにどこかに行くなんて！」

「グスツ…もう無茶しないでよお兄様！」

「でも…良かったよおおお…！」

「私達…兄さんが死んで本当になんしんでたんだからあ！」

「うええええん！らんちやあああん！」

「おにいさまあ…もうどこにもいかないで…」

皆が泣きながら俺にそう言う。全く…妹を泣かすなんて長男失格だな俺…それよりもそろそろ限界なんだけど…てか奏の大きな胸が当たってるんですけどお!?

「修…頼む、助けてくれ…」

「自業自得だ兄貴、暫くそのままいな。」

「毎度の事だけど本当に心配させるね兄さんは…」

「うう…無事で良かったです兄上！」

弟達に助けを求めたが修と遙は助ける気なしで輝は涙を流しながら喜んでいた。あ、ダメだこりや助けてくれない。

（なあ？だから言つたろ、心配させるって？）

「（うっせ。）ゴメンな皆、それと…」

『???』

「ただいま。」

『っ！おかえりなさい!!!』

こうして俺は家族の元へと帰ってきた。

その後、帰ってきた親父にもみくちやにされまくってついカツとなつて能力を使つて液状化し他あとコブラツイストをかましてしまった…だが私は謝らない。

その日の晩飯は俺の好きなハンバーグで何故かその日に食ったハンバーグは格別に美味かった。

（ラン…やっぱり家族って良いものだな。）

「……あたりまえだ。」

「何か言った筈兄い？」

「嫌！何でもない！タダの独り言だから！」

地球から大分離れた場所に巨大な円盤が奇妙な音を出して飛んでいた。そして円盤の内部にある部屋、バルタン星人シーカーが地球を見ていた。

「タダが殺られましたか……まあいいでしょう。次の計画は決まっていますからね？」
「そう言いシーカーは部屋から出ていった。」

……T o b e c o n t i n u e d